

## 「謀叛の児 宮崎滔天の『世界革命』」 加藤直樹

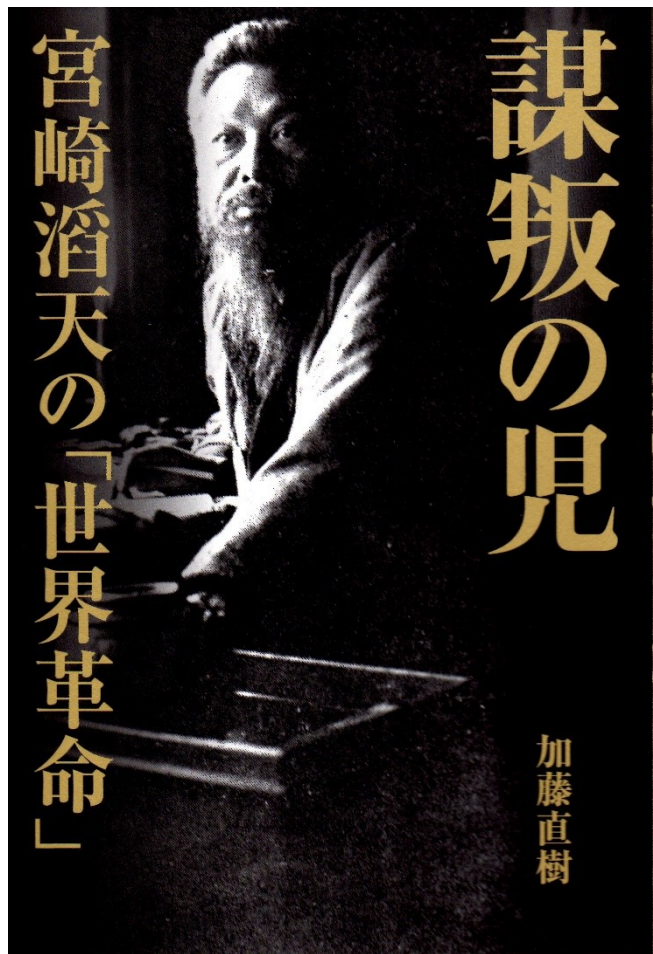
新聞の書評欄で目に留まった本書。加藤さんは、関東大震災ジェノサイドの残響「九月、東京の路上で」(2014年)の著書があり、2015年に豊中に来ていただき、その話をさせていただいたこともあり、存じ上げていた。

その加藤さんが宮崎滔天？とはと、少々訝しんだ。息子の龍介は「白蓮事件」のからみで知っていたが、滔天自身のことは知らず、ズシリと重さが伝わる350頁あまりの大著に挑むことにした。

序章で加藤さんは本書の動機(ねらい)について書いている。「典型的な大陸浪人として、夢想的なアジア主義者として、さらには情の人あるいは侠の人としてロマンチックに語られ、そして時には軽んじられてきた宮崎滔天について、その思想性に光を当てることで別の風貌を浮かび上がらせてみたいと思う。滔天は、独自の深い思索によって日本と中国、世界の行方を見つめ続けた人物であり、その射程の長さは驚くべきものがある。」

さらに、中心テーマについては、「彼はどのように『世界革命としての中国革命』という思想に行きついたのか、その実行の道をどのようにして歩んだのか。何を得て、何を得られなかったのか。その痕跡をつなげながら、一筋の流れとして、彼の生涯をたどってみたい。そのことがおのずと、私たちの国が何を得て、何を得ずにここまで来たのかを知ることにもつながると思うからである。」と言う。

私たちが生きているまさに今の時代、中国や朝鮮・韓国などアジアの国々との緊張や摩擦は不断のものとなり、時には厳しい状況も出現し、排外的・差別的な言論が一定の影響をもってきている。それもこれもこれまでの歴史のなかで醸成され、生まれ、私たちの血肉になっているものがあるからということもできよう。その意味では、現実の問題の根は、私たち自身の中にあると言っていいのかもしれない。それをどう見極め、問題の在処を探り当てていくのか、内省と自省が不可欠だろう。そして、その助けとなるのは、歴史



的時代にあって、同化をよしとせず、自らの信念と思想に生きた人物だろう。戦争と貧困をなくし、万民平等の世界を実現するためにその人生を賭けた滔天もその一人とっていい。

それにしても読み進むと、滔天の破格さ、奔放さは超ド級だ。家庭や妻子を顧みず、勝手気ままをやり通したことは批判されるべきことだが、それも私事のためではなく、自らの信念を貫くためであったことも事実だ。だから、妻の鎚も龍介とも最後は理解し合えたのだろう。その意味では、憎めない人だったのかもしれない。

1840年のアヘン戦争以来、資本主義列強の侵略を受けて半植民地状態に落ち込んでいた中国で真の独立を目指し、1911年に反清朝の暴動が全国に広がり、翌12年1月、孫文が臨時大総統に就任、中華民国が成立。始皇帝から2000年以上続いた中国の皇帝専制政治が終わりを告げ、中国最初の(またアジア最初の)共和政国家が出現した辛亥革命だ。しかし、軍閥の抗争、帝国主義列強の支配、封建社会の残存などの克服がなおも課題となり、革命は継続した。そして、第一次世界大戦後の中国ナショナリズムの高揚の中、孫文は中国国民党を結成、1924年には中国共産党との間で国共合作を成立させた。

日本国内では革命派・清国双方を支援する動きがあったが、なかでも滔天は孫文と固い友情を結び、亡命者や留学生とともに革命に挺身し、惜しみない支援をした。滔天とその兄・民蔵と孫文との友情は最後まで続き、「革命におこたらざる者は宮崎兄弟なり」と語ったとされている。滔天その人は生涯無職で、妻子は塗炭の苦しみを余儀なくされたが、中国革命が世界革命に通じるとの信念に生きた人だった。有為転変・激動する時勢にあって、一時は浪曲師となって資金を稼ぐなど、その変哲ぶりも並ではない。

琉球・台湾・朝鮮・中国と膨張し、帝国化していく日本にあって、ことごとく国家主義にからめとられていく中で、孤塁を守るがごとく中国革命に献身し、志を全うした滔天、その思想・人物は時代を超えたスケールを持つとっていい。

最後に、巻末に並んだ参考文献のリストを見て、「なるほど」と納得した。滔天その人の生涯をたどるといことは、つながりのあった人物はもちろん、当時の時代背景や出来事をきちんと把握する作業が不可欠になる。これだけのリストを読み込んだ上で本書が書かれているのだが、思っただけで気が遠くなりそう。加藤さんの胆力と筆力に敬意を表したい。

滔天その人の思想や行動を理解するには、どのような時代背景・出来事があったのかを把握しておくことは大事なことだ。それで、出来事と孫文、滔天の動きを書き出してみた。こうすると少しは全容が見えてきそうか？

- 1866年 **孫文** 生まれる。
- 1871年 **滔天** 生まれる。
- 1871年 日清修好条規(国交を樹立する対等な条約)。。
- 1874年 台湾出兵(琉球漁民の殺害に対する報復を口実に台湾に出兵、日本最初の海外派兵)。。
- 1875年 江華島事件(朝鮮の江華島を砲撃し、開国を迫った事件)
- 1876年 日朝修好条規締結(朝鮮は開国したが、明らかな不平等条約)
- 1879年 琉球処分(琉球藩を廃し、沖縄県を設置。琉球王国は約 500 年の歴史を閉じる)
- 1884年 甲申政変で朝鮮独立党首領の金玉均が日本に亡命。
- 1885年 **滔天** 徳富猪一郎経営の大江義塾(熊本)に入学。(民蔵上京、中江兆民の仏学塾に学ぶ)
- 1886年 **滔天** 上京し私塾に入学。キリスト教に魅かれ教会に通う。
- 1889年 **滔天** イサク・アブラハムと交友、信仰が揺らぎ棄教。
- 1891年 **滔天** ハワイ行きを計画するが、兄彌蔵の説得で中国革命主義に共鳴(以後の大方針)
- 1892年 **滔天** 長崎より上海に渡るが、旅費を騙し取られて帰国。前田槌と結婚。長男龍介誕生。
- 1893年 **滔天** 彌蔵と相談し金玉均との提携を策して上京。
- 1894年 **滔天** 金と中国革命の提携を約し、彌蔵と中国行き準備に着手。李鴻章説得に赴いた金が閔妃の刺客に上海で暗殺される。
- 1894年 **孫文** ハワイで興中会を結成。
- 1894年 日清戦争(下関条約、三国干渉)
- 1895年 **滔天** 彌蔵との分業策で滔天タイへ、彌蔵は辮髪と変名にて横浜の中国人商館に住み込む。
- 1895年 **孫文** 日本との講和に反対して武装蜂起したが失敗し、日本に亡命。
- 1896年 **滔天** 再びタイで農業に従事。熱病で九死に一生を得、帰国。彌蔵、腸結核で死去(29歳)。
- 1897年 **滔天** 民蔵、アメリカに出発。横浜で孫(31歳)と初会見。孫を犬養にひきあわせる。
- 1899年 **滔天** 中国にて興中会・哥老会・三合会合同の興漢会結成に尽力。
- 1900年 **滔天** 南清蜂起のため孫文と横浜を出発。清朝、列国との義和団戦争。李鴻章側と接触後、康有為との合作のためにシンガポールに立ち寄るが、康有為暗殺計画の嫌疑で逮捕、投獄、追放。九龍で孫と面会后帰国。
- 1901年 **滔天** 犬養邸の酒席で内田良平と言ひ合い、食器で額を割られる。浪花節語りになることを決意。
- 1902年 **滔天** 桃中軒雲右衛門に入門、桃中軒牛右衛門を名乗り浪花節修業。
- 1903年 **滔天** 長崎の楽屋で愛人柿沼とよが女兒を出産。一座と決別し、佐世保で柿沼母子と生活。
- 1905年 日露戦争(ポーツマス条約)
- 1905年 **滔天** 妻・槌一家上京、滔天は柿沼母子と別れ新宿に新居。滔天、中国革命同盟会創立に尽力。(孫文総理、黄興副総理)
- 1905年 **孫文** 東京で中国同盟会を結成、三民主義を理念とする四大綱領を掲げる。
- 1906年 **滔天** ら革命評論社『革命評論』創刊。
- 1909年 伊藤博文がハルピンで殺される。
- 1910年 「韓国併合に関する条約」が公布
- 1910年 **滔天** 十年ぶりで中国に渡り香港で黄興と会見、旅中初めての吐血、帰国。大逆事件の捜査始まり、荒尾の生家家宅搜索。
- 1911年 **滔天** 内田らと革命支持の有隣会結成するとともに、上海入りし、孫文の香港着を迎える。
- 1911年 **孫文** 辛亥革命が起きると帰国し、翌年正月成立した中華民国の臨時大總統に就任。
- 1913年 **孫文** 袁世凱の独裁に反対する第二革命が失敗して日本に亡命、東京で中華革命党を結成。
- 1914年 第1次世界大戦
- 1915年 対華 21ヶ条要求
- 1915年 **滔天** 衆議院議員選挙に出馬、最下位落選。
- 1916年 **孫文** 中華革命党本部を上海に移し中国へ、**滔天** 同行。
- 1917年 **滔天** 黄興国葬に列席。湖南省立第一師範学校生毛沢東(24歳)らの招きで同校にて講演。一時、家族と上海で暮らす。
- 1917年 ロシア革命
- 1917年 **孫文** 広東軍政府を樹立し大元帥となって北京の段祺瑞軍閥政府に対抗したが失敗。
- 1918年 米騒動
- 1919年 朝鮮で「3.1独立運動」起こる。

- 1919年 溥天 息子龍介と上海行き、孫文とも会談。
- 1919年 孫文 「五・四運動」を機に大衆重視に転換、中国国民党と改めて総理となる。
- 1920年 龍介、柳原白蓮との恋愛関係が世間の問題に。溥天 夫妻で大宇宙教に帰依。
- 1921年 溥天 孫文の招きを受け、最後となる中国渡航(広東へ)。
- 1922年 溥天 尿毒症併発。12月6日午前1時30分瞑目(51歳)。
- 1923年 溥天 上海にて孫文ら主催の追悼会が開かれ「中国革命に絶大の功績」の賛辞を受ける。
- 1924年 孫文 中国国民党一全大会を広州で開催、国共合作(第一次)を正式に成立させた。
- 1925年 孫文 肝臓ガンのため「革命いまだ成らず」という遺書を残して死去(59歳)。
- 1925年 治安維持法制定。
- 1931年 満州事変
- 1937年 盧溝橋事件